
東日本大震災 医療支援の反省点／医療再建、青写真描けず
(NIKKEI MEDICAL 2012.03 p.112-117)

2018年7月13日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

～医療支援～

1. 導入

1995年に起きた阪神淡路大震災では、組織的医療支援を展開したのは日本赤十字社のみであったが、東日本大震災ではDMAT、JMATなど多岐にわたり、未曾有の大災害にも関わらず、一定の成果を上げた。また、阪神淡路大震災の教訓を生かし、国が整えてきた災害医療の仕組みも大いに機能した。しかし勿論、想定外の事態に見舞われることもあり、反省と今後の課題も浮かび上がった。

2. 課題①：情報収集

災害発生直後の医療支援で最も重要であるのが「状況の把握」である。詳細な情報が分からなければ医療チームを必要とされる場所へ必要な数だけ派遣することは困難を極める。本地震において、大半の通信手段は断絶し、情報収集が難しい状況に陥った。この状況下でおおむね利用が可能であったのが衛星電話であった。しかし衛星電話があっても使用方法が分からなかったり充電していない病院があったのも事実であり、今後はこれを教訓に衛星電話の導入と使用法の周知を徹底する考えである。

3. 課題②：コーディネート

情報が入らない中、医療チームを差配・調整する責任者がいなかったため、各々のチームが自己判断で被災地に入る事態が起り、現場で効率的に医療支援を行えない状況が生まれた。また、たくさんチームが駆け付けた地域と、逆に全く支援が届かない地域と両極端であったのも事実である。これを受けて、震災発生時には医療チームの派遣を調整する派遣調整本部の設置と、日ごろから情報交換可能な場所を設ける必要性が示唆されることとなった。

4. 課題③：被災地の医療ニーズ

被災地における医療ニーズは当初、外傷や急性疾患が想定されたが、本震災では糖尿病や高血圧などの持病の悪化、肺炎など想定外に慢性疾患ばかりであった。例えば高血圧患者の場合、どんな薬剤を飲んでいたので細かく問診した上で処方を決定する必要があり、総合的な診療能力が問われる場面が多く、震災からしばらく経過しても医療支援チームはこの想定外の医療ニーズに翻弄されたといえる。これを受け、被災地のあらゆるニーズに対応する意識をもつこと、医療ニーズに合ったきめ細かい救護班の編成を行う方針が定められた。

5. 課題④：ロジスティクス

医療支援においては物資調達・隊員の移動手段確保を担う後方支援業務が重要になってくる。本震災において、十分な水や食料がなく被災地に到着するも機能しないチームも見られた。また、ガソリ

ン不足なども制約となった。これを受けて、後方支援を行う要員の養成・組織力を生かした後方支援を検討していく考えである。

～医療再建～

被災地では、仮設の診療所や病院における診療の再開・復旧が本格化し、医療再建に向けて検討が進んでいる。ただしそこに立ちほだかる問題は山積みであり、特にこれまで以上の深刻な医師不足という難題も降りかかっている。

ここで3つの主要な被災都道府県の状況をまとめる。宮城県では機能分担することでプライマリケアを充実する考えだ。このため従来のレベルまでは病床数を復活させない方針である。岩手県では県立病院の扱いに焦点を当てている。県立病院の移転、新築後の姿は全く決まっておらず、震災による人口減で入院機能がどれほど必要なのかもわからないため慎重な検討を要されている。福島県では、医師流出への対応が急がれている。原発警戒区域ではない地域の病院は診療を再開したものの、医療従事者の流出が深刻で診療は縮小の一途をたどっている。これは先に述べた他の二県においても言うことであり、当直が必要になる入院機能を復活させるためには医師の増員が不可欠であることもあり、対策が必要である。各都道府県は医師数確保のためにあらゆる策を講じているが、これらの施策で医師が確保できるかどうかは不明なのが現状である。

～考察～

天災はいつ起こりうるか想像しえない。過去の教訓を活かし、少しでも多くの人を救うため災害医学を学ぶことはこれから医師となる私たちにとって必須のことである。どれだけ備えていたとしても、それを超える事態が発生する可能性は十分あり、想定できない被害が出るかもしれない。事実、この直近1週間で起きた大雨による災害もここまで大規模だとは想像できなかった。防ぎえる事態は防ぎ、想定範囲を超えたことに対しどこまで冷静かつ早急に対応できるか、その能力が問われるのが災害の現場である。起こってからでは遅いかもしれないが、起こってからでないと学べないこともある。ゆえに、過去の災害で見つかった課題は必ずその対策と反省点を講じ、少しでも被害を減らすことが私たちにできることである。東日本大震災の爪痕は大きく、未だ抱える問題が多いことを痛感した。1日でも早い復興を願うとともに、私たち個人個人が災害医学への知識を高めることが未来の災害医療を支える小さな一歩になるのではないかと考える。